

無 農 薬 の 悲 劇 (XVIII)

宇都宮大学雑草科学研究センター長 近内 誠 登

私は大学で農薬学の講義を行っている。そのなかで農学を志す者にとって、作物を加害生物から保護する技術と心をもたなくて農業を語る資格のないことを2コマ(3時間)ほど話すことにしている。私自身農家生れで、草取り労働や田植え、稲刈りの激労をいやという程味わってきたので、農薬の恩恵を人一倍強く感じている。

農薬学は15コマの時間であるが、最後の試験の時間には「農業における農薬の是非論」を出題することになっている。平成3年以前の解答は70%以上が農薬不用論で、農薬の必要性を説いてきた私は、腹が立つというよりは空しい気持ちになるばかりであった。その理由を正せば「週間誌」「テレビ」そして「お母さん」という答えが返ってきた。何年も同じ傾向が続いた。今の若者のニュースソースの原点を知らされる気がしてならなかった。

ところが、平成6年あたりから様子が一変し、90%以上が農薬必要論を書くようになった。何という変り様だろうか。どうみても私の弁舌が上達したとは思えないのに。しかし根拠は充分にあった。その理由は平成5年の凶作と世界的人口爆発に対処する食糧問題である。

一部マスコミや消費者は未だに農薬悪役論や不要論を唱えているが、若い人達はきちんと社会情勢を見極める目と科学的判断力を持ってい

ることに安堵しているこの頃である。農薬学を担当している千葉大、京都大の先生にも伺ったところ、全く同じ傾向であることを聞き、将来を托すに足る若人が増えていることに意を強くしている。

バブルがはじけたことで、物の真髄を見る目が養われた面があるようにも思えてならない。

最近の報道から

マスコミの農薬批判は一時のように口裏をあわせた様な過熱ぶりはみられなくなったが、相変わらずゲリラの報道がみられる。何か忘れさせまいとする一部マスコミの底意地の執念がうかがえる。

11月のNHKの放映で、輸入されたアメリカ産の綿が無農薬栽培で作られたことを強調し、これでアトピー性皮膚炎がなくなるだろうと真面目に解説していた。農薬を使った綿が本当にアトピーを引き起していたのだろうか。もし無農薬栽培の綿を使ってアトピーになったら何と説明するのだろうか。少なくとも農薬を心配するなら農薬を使った使わないとする論点よりも、農薬が残っているかどうかを確認することが先ではないだろうか。自然科学分野の人なら、まず考えることだが、社会系の人には物事を情緒的に把える習癖があるらしく、この考えで自然科学分野を評論するとき誤った方向へ導いていく

ことになる。

外国人からみれば、日本人ほど「自然食品」とか、「無農薬食品」の好きな人種はないと映るらしい。売る側からみれば、この心理を利用しない道理はない。そして買う側も一喜一憂して満足と不安の狭間で、世界の潮流を無視してわが道をゆく姿勢がみられる。

ある日名馬シンザンの取材報道があり、シンザンは34才（人間で云えば120才）の高令とのこと、その馬の世話係が無農薬のニンジンを食べさせているからとさりげなく語っていた。

一体、この馬はニンジンだけを食べて生きているのだろうか、一瞬、骨髄に思えてきた。ニンジンの栽培に農薬を使う人がどれだけいるだろうか。特殊土壌での線虫駆除ならまだしも、病害虫の加害のない作物がニンジンであり、農薬を使う必要がないのである。同様に店頭で無農薬のレタスをつけている、シュンギク、ニラ、レンコン、サツマイモなども農薬の必要のない作物である。つまり作物自身が殺虫、殺菌性物質をもっているからである。

無農薬ニンジンが馬の長命のヒケツならば他の馬も同様に飼育し、その馬群が全部長命であることの証しを示してもらいたいものである。金さん、銀さんも長寿のヒケツが自然食品とか無農薬食品のせいになっているのだろうか。

DDVPのこと

農薬登録総数は現在6,000件を数え、有効成分の種類も300種以上である。このように多種類に及ぶのは、作物、地域・時期、病害虫、雑草、施用法が著るしく広汎にわたるためである。

オウム教が何とかサティアンで製造したのはDDVPであると執拗に弁解していた。しかしDDVPでないとする決定的反論が全く聞かれ

なかった。心ではウソと知っていても。

もし農薬に関係した人が記者側にいたら、この非常識な弁解は即時に否定されだろうに。それは、作物に加害する多くの病害虫を、DDVPという殺虫剤だけで防除できるとする根拠は何か、DDVP（48%乳剤）を1,000倍で500 l/10 a 散布として成分で250 gである。もし仮に1トンの成分量を作ったとして400ha分に相当する。保有原料からみて数10倍のDDVPが作れるし、何よりも400haの農地がどこに存在したかである。

詭弁を論破するには農薬を使用する側の人を起用すればよかったのに、合成者を重視して登用したところに相手の意のままに長引く結果となった。原料、合成法、化学構造面でDDVPに類似していることから、逃避策としてDDVPの名を挙げたものだが、もっと早い段階でこの詭弁をつぶしておけばその後の展開が変っていたらう。

後日談として、サリンは農薬に近いものであるという印象をもった人は少なくないようである。

ある新聞記事に「サリンは分解が早い、同じ有機リン農薬の方がはるかに長い」とした文が載っていたが、これが大変な困乱を招くことになった。はるかに長いというこの表現は、とりようによっては半永久的ともとれる。ある農家の人がスイカのアブラムシ防除にスミチオン粉剤（昭和57年製）を散いたが、スイカを捨てるべきか、土を入れかえるべきかとを相談にかけ込んできた。この新聞記事を片手にもって。4～5日で分解するスミチオン、そしてこれまで何年も使ってきたスミチオンにこのような危惧を抱かせる記事の責任は大きい。

しかし新聞記事だけで責めることはできない。

農家の人自身農業に対する認識不足も否めない。農業販売に携わる側としても残留期間など初歩的な広報活動が必要であろう。とくに老令人口が農業の主体を占めている今では。

マスコミに望むこと

最近セアカゴケグモなる毒グモが発見され、関西一帯で大騒ぎとなっている。どのような手段をつくしても絶滅は不可能とのこと。

それはちょうどザリガニ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシが絶滅できないように。人間が考えるほど自然の淘汰を経て生き残った生物群は単純なものではない。むしろ人間の頭脳をはるかに越えた適応能力と生命機能を備えている。これらの防除には農業と同じ成分の防疫剤が使われている。しかし撃滅はできない。つまり発生増殖期に毎年使わなければならないし、それは絶滅ではなく密度の高まりを防ぐだけの手段でしかない。

防疫剤の使用には誰一人反対する人がいないが、作物保護の目的で使う農業となると躍気になってマスコミ始め消費者が反対する。

本来作物を加害する病害虫も人間を加害する病害虫も本質的に変ることではない。したがって使われている薬剤も同じものか、極めて酷似

しているものが多い。

マスコミに望むことは、合成化合物が医薬や防疫剤は許せるが、農業と名のついたものにはどうして反対しなければならないかである。セアカゴケグモは退治しなければならないものとして、下水溝に朦々と散布している農業＝防疫剤をどう考えているのだろうか。同じ成分のものが肯定と否定の理論となることがどうしても判らない。食糧は充分にあるから今更農業を使ってまで病害虫や雑草を防除する必要はないとする思い上った態度、これが国際化を標榜する先進国のとるべき道だろうか。

農家＝生産者は良質で高収量を唯一のはげみとして毎年農業に精を出している。この意欲を謳歌し、食糧生産の重要性、就中作物保護の必要性といった生産者の立場に立った見方をマスコミに期待したい。

草は手で取り、害虫は鐘や太鼓で虫送りをする昔の姿に戻したいとする欲求が通るとすれば、先進国を自認する一国の中に、近代文明社会と過重労働前近代社会の二重構造を作ることになる。(訂正とお詫び 第28巻第2号無農薬の悲劇(XIV)は(XVI)、第11号(XVI)は(XVII)の誤りでした、訂正してお詫びいたします。)

芝生の造成と管理 — 芝草管理者のために —

眞木芳助／編集

B5判 定価20,000円(税込)

環境保全のための資源として芝生の需要が増している。本書は芝生の造成から管理にいたる芝生づくりのすべてをゴルフ場の例を中心に分かりやすく解説。

全国農村教育協会

〒110 東京都台東区台東1-26-6(植調会館)
Tel.03-3833-1821 Fax.03-3833-1665